

■ 世界市場を制した「HOKUREN」ブランド

明治44年(1911)網走本線「野付牛～陸別」間が開通し、翌年には鉄路は網走まで延伸しそして湧別、遠軽、留辺蘂、野付牛と北網の山手線と言う鉄路が広がっていきます。

この鉄路延伸により野付牛町は、人口も増え商店・銀行・料亭など次々とでき、街中には薄荷の香りが漂う薄荷景気で賑わうようになってきました。

明治45年(大正元年)、薄荷農家と薄荷商のサミュエル商会との間で取引契約から発したサミュエル事件をはじめ、薄荷商人の安値協定・農家の売り渋りなど薄荷相場をめぐる激しい駆け引きが繰り返されるようになり、薄荷価格の暴騰と暴落が繰り返されます。

大正13年(1924)関東大震災で、横浜の倉庫に貯蔵されていた薄荷が焼失し、品不足から薄荷は更に暴騰し俗に言う「薄荷成金」が誕生し、作付面積も拡大していきます。

このような暴騰・暴落を繰り返すことに危惧を抱いた野付牛町と農協は、北聯(ほくれん)に薄荷工場の要請をし、要請を受けた北聯は野付牛支所を開設し、薄荷「取卸油」の取引を始めたことでハッカ価格は安定化していきます。



▲ 池北線と薄荷工場

昭和8年(1933)11月竣工した北聯北見薄荷工場は、翌年9月8日に落成式を挙行し、初代工場長に高田初次氏が就任、同年11月から道庁技師・加賀操氏が二代目工場長として招かれハッカの結晶、精油製造などの操業開始となります。

まさに、北聯最初の農産物加工事業が「HOKUREN」ブランドの始まりです。

* 加賀操氏は、戦後参議院議員を一期務めた後、昭和29年(1954)昭和天皇、皇后をお迎え案内するために、昭和28年7月に13代工場長として赴任、昭和36年まで工場長として勤めています。

工場ができる前にも日本薄荷の殆どが海外に輸出されていましたが、「HOKUREN」もニューヨークやロンドンなどの国際市場に進出し、やがて品質の良さが評価され高値で取引されるようになり、わずか3年で確固たる地位を築くまでになり、昭和14年(1939)には北見薄荷工場の製品は世界市場の7割を制するまでに成長しました。

昭和16年12月8日、真珠湾攻撃により太平洋戦争勃発。

輸出は止まり、薄荷畑は食糧畑に、蒸溜装置は軍用松葉油の採油に転用されます。



▲ 北聯の輸出缶と輸出箱

日本薄荷を入手できなくなった世界の薄荷市場は、ブラジル産を求め日本に変わりブラジル産は世界一の生産量を誇るようになり、また同時に石油化学の進化で薄荷の主成分のメンソールが抽出されたことで、安価になり薄荷需要の多くを担うようになっていきます。